

「イスラエル建国史」

4 初期のシオニズム運動

ユダヤ・中東研究家、滝川義人

1881-2年のポグロムは、ユダヤ人の大量流出を促し、その大半はアメリカへ移住した。しかし、それは別の動きもつくりだした。

ポグロムのもたらしたこの袋小路が、先駆的シオニストを生み出したのである。カイダン（現リトアニア）に生まれたリエンブルム（モシェ・ライブ1843-1910）は、

その一人である。正統派の教育をうけた後、ハスカラの信奉者となった。詩人エフダ・ライブ・ゴルドン（1831-1892）と共に、ユダヤ教の改革運動にとり組んだが、宗教界から猛烈な反撥をかい、農業分野で労働運動をおこして、ユダヤ人の地位向上をはかろうとしました。しかしポグロムがこの構想を打ち砕いた。1881年秋、リエンブルムは、ロシア語で民族主義的色彩の濃い論文を書き始めた。それは「父祖の地におけるユダヤ人の再生」を訴える内容であった。

トマショフ（現ポーランド）出身のレオ・ピンスカー（1821-1891）は、軍医としてクリミア戦争に従軍、退役後医者として働く傍ら、ロシア・ユダヤ人啓蒙推進協会（Mefitzei Haskala）のオデッサ事務局長として、活動していた。目的は同化によるユダヤ人問題の解決で、ピンスカーは、協会から月刊誌「その日」（Diyen）を発行して、世俗文化の普及と同化促進に努めていた。

ピンスカーも絶望したひとりである。1871年のオデッサポグロム（ここでは19世紀になって1821年、1859年にも発生した）で打撃をうけ、10年後の大ポグロムで、ピンスカーは、同化によるユダヤ人問題の解決は不可能と考えるに至った。多数派として存在する社会をつくらない限り、根本的な解決にならない。このように考えたピンスカーは、西ヨーロッパ各地をまわり、

ユダヤ人有力者に意見を求めた。しかし、各地に散在するユダヤ人を組織するのは、膨大なエネルギーを必要とする。まとまった土地の取得を考えただけでも、気の遠くなるような話で、殆どの人が疑問視した。

真剣に耳を傾けた人が、イギリスのユダヤ人代表者会議会長アーサー・コーヘンである。コーヘンは社会事業家のモーゼス・モンテフィオール（1784-1885）の甥で、西欧の世論を喚起せよと勧めた。その助言でピンスカーがドイツ語で書いたのが、「自力解放」（Auto-emanzipation, 1882）と題する小冊子である。同胞に対する1ユダヤ人の警鐘という副題がついていた。

この小冊子でピンスカーは、反ユダヤ主義が消滅しつつあるというのは幻想である、と主張した。少数派として異質の存在である限り、反ユダヤ主義はなくなる。法律で平等の権利を認めても社会が認めない。ピンスカーは、推進母体として中央協議会をつくり、そこを通した資金集めと事業の組織化を考えた。ただし最初の頃は、ユダヤ人の定住地としての場所を特定していない。

エレッツ・イスラエルを目指す運動

しかし、民族誕生の地エレッツ・イスラエルへ行こうとする運動もおこった。ホベベイ・ツィオン（シオンを愛する人）と称し、ロシア・ポーランド各地に生まれた。

そのひとつが、ハリコフ大学（ウクライナ東部）のユダヤ人学生約50名がつくった組織で、ビルと称した。イザヤ書第2章5「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」に由来する。ヘブライ語の頭文字をとったのである。最初、創世記第14章15「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出発させなさい」の頭文字をとってダビウと呼んだ。しかし、ほかの人にエレッツ・イスラエル行きを勧めるより、自分達が率先して行くべきである、という考えに変わったのである。

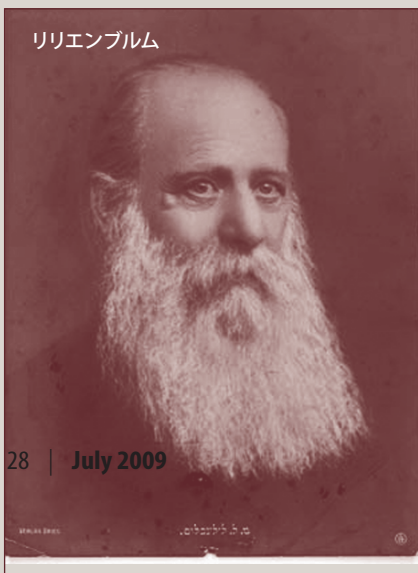
ビルグループは20ヶ所を越える都市に支部を設け、本部はコンスタンチノープルに進出した。青年達には高いところざしがあり、メンバーの土地私有を禁じる共同体村の建設をめざしていた。



ロシアのポグロム

先駆的シオニスト

ロシアのユダヤ人問題は、ユダヤ人の同化と平等の権利獲得、あるいは革命による既存体制の根本的変化によって、解決する。知識人達はそう期待していた。しかし、ポグロムはその夢を打ち砕いた。革命家達はポグロムに沈黙し、ロシア政府は、経済、社会生活からユダヤ人を排除する一連の「暫定、法（五月法）」を導入し、しめつけを益々強めた。



リエンブルム

しかし現実には厳しかった。ミクベイスラエルの労働者になったが、雀の涙ほどの収入しかなく、借金がかさむばかりで、頼りにしたシャルル・ネッターは病死し、離脱者もでてきた。メンバー達は、学校長サムエル・ヒルシュの口利きで、リシオン・レツィオンへ移った。

リシオン・レツィオンは、別のホベベイツィオン組によって、1882年に設立された。南ロシアのオルシャ生まれのレボンチン（ザルマン・ダビッド1856-1940）に率いられた一行10名である。村名は、「見よ、シオンに初めて告げられていたことは、ここに実現した」というくだりのイザヤ書第41章27に由来する。しかし、土地の購入、水源探し、住居建設、農具入手で資金を使い果し、このグループもたちまち困窮した。この村にみられるように、初期の入植は、土地の購入から当面の生活費まで資金の裏付けを欠き、この時代に建設された開拓村6ヶ村は、いずれも経営難におちいった。



モーゼス・モンテフィオールと彼が残した風車

3人の社会事業家

初期の開拓事業を支えたのは、3人の社会事業家である。

第一は先述のモンテフィオールである。エルサレム新市の建設者として知られる。イギリスで財を成し、60歳の時実業界から引退し、死去するまで、ユダヤ人救済事業に専念した。本人はほかの2人とは違い、ユダヤ民族の独立を考えており、100から200の村を建設する計画をたてた。しかし、機は熟さず当時の政治状況では無理であった。エジプトの総督ムハンマド・アリがエジプトとエレッツ・イスラエルを支配した時期（1832-40）、モンテフィオールはアリと交渉しようとしたが、アリ本人がトルコ政府によって排除されてしまったのである。モンテフィオールは、99歳の誕生日に開拓村の建設運営資金として多額の金を寄付している。

パリ在住のドイツの銀行家ヒルシュ（パロン・モリス・ド・1831-96）は、ロシア、ハンガリー、トルコなどの鉄道建設や鉱山開発で成功した人物である。ひとり息子ルシアン（シモン）の死を契機に、社会事業に専念するようになった。特にロシアの困窮ユダヤ人の救出が急務と考え、1891年に会社組織のユダヤ人入植協会（ICA）を設立した。資本金200万ポンド、後に1000万ポンドに増資され、南北アメリカ特にアルゼンチンへの移住事業に力を入れた。事業は1930年代にピークに達し、ユダヤ入植者2万人が、50万ヘクタールの地を耕作していた。

1896年4月、ヒルシュの死でICAはパレスチナの開拓村支援に力を入れ、1899年から1923年まで、ロスチャイルドコロニーを管理した。

第3の人物がロスチャイルド（パロン・エドモンド・ド・1845-1934）である。初代アムシェルの孫にあたり、フランスの出身である。1882年9月28日、パリの首席ラビ・ツアドク・カーン師の紹介で、二人の男性がエドモンドの許を訪れた。ロシ



アのホベベイツィオン運動の指導者でラビのシュムエル・モレヒヴァー師とリシオン・レツィオンのヨセフ・ファインベルクである。財政難の開拓村を支援して欲しい、と二人は要請した。苦境を知ったエドモンドは彼等の情熱に動かされ、3万フランを寄付した。そして、この出会いがきっかけとなって、パレスチナの開拓事業にかかわっていく。ロシュピナ、ザマリ（父ヤコブの名を記念してジフロン・ヤコブと改称）などの建設、運営を支援し、ワイン醸造など産業面の発展にも貢献するが、開拓のパイオニア達とさまざまな点で摩擦を生じた。

第一アリア

1882年に始まる移住は1904年までを一区切りとして、第一アリアと呼ばれる。1880年代初めのユダヤ人口は2万4000人で、エルサレム、ヘブロン、ツファット、ティベリアに集中していたが、この第一アリアで3万から4万人のユダヤ人が移住したと推測される。ビルグループは移住2年にして空中分解をおこした。崩壊の原因を調べると、土地の私有をめぐる問題がみえてくる。さらにロスチャイルドと入植者との摩擦は開拓事業にかかわる本質的な問題を内包していた。